



Sr.池崎の

ブラジルから

Boa tarde!

(ボア タールジ! : こんにちは!)

第11回目 9月25日(土)~10月1日(金)までのレポート

9月25日 パラナ老人福祉和順会創立35周年記念式典

マリンガでお世話になっている植田さんですが、実は、アコーディオンの名手らしいです。今日は植田さんが、パラナ老人福祉和順会の創立35周年記念式典でアコーディオンを演奏するというので聞きに行ってきました。



この和順会というのは、マリンガにある日系の老人ホームで、家族などの身寄りがなく、自分一人では生活することができない老人のための施設です。また、この施設は、マリンガにある浄土宗のお寺に隣接しているとも聞いていたので、ブラジルのお寺がどのようなものか見学してみたいとも思っていました。観光地図では、ホテルから30～40分ぐらいで歩ける距離でしたが、実際には1時間ぐらいかかってしまいました。

道順を2度ほど尋ねた後、ようやく到着。そこには、日本風の立派なお寺が建っていました。先日行った日本庭園もそうでしたが、さすが日系人の多い町だなと思いました。お寺の奥に、日本語で「パラナ老人福祉和順会」と大きく壁面に書かれた建物がありました。そこが、日系の方々のお年寄りホームでした。なんでも、中での食事は日本食、そして、入浴用の大浴場もあるそうです。ブラジルに来て浴槽につかることがなかったので、私が入りたいくらいでした。

老人ホームの別棟の講堂では、パラナ老人福祉和順会創立35周年記念式典がすでに行われており、地元の医師による記念講演が行われていました。その後、演芸大会が始まりました。はじめの演目は、青年による太鼓(右写真上)、その後、舞踊や民謡、浪曲など、様々な芸が披露されていました。なかには、お寺の関係者による「腹話術」と題したコメディも披露され(右写真中)、大爆笑を誘っていました。そして、植田さんのアコーディオン(右写真下)も登場しました。今日は、日系のお年寄りの会ということもあり、ステージ上ではなく、客席の中でアコーディオンを弾き、しかも、お年寄りも知っている懐メロや瀬戸の花嫁など親しみのある曲をメドレーで披露していました。話によると、1年間アコーディオンにはさわっていなかったそうですが、すごい腕前でした。昔は、オルガン教室をもち、200名程度の生徒さんを相手にしていた時期もあったそうです。



全く話は変わりますが、来週の日曜日は、以前にもちょっと話した4大選挙です。今、ブラジルの町中では左写真のように、車の後ろに立候補者のポスターが貼られた車がとても多く走っています。

9月27日 アプカラナ市長訪問

アプカラナ市は、ブラジル国内では珍しく一日制の教育を先進的に取り入れている市で、市内に 37 校ある市立学校の内 35 校で一日制を採用しています。それだけに、ここの教育局の訪問はとても楽しみでした。

ここの教育局は、これまでの教育局と異なり市役所内にありました。到着すると、市長室へ案内されました。控え室で新聞社の方に取材を受けた後、市長室へ入りました。今回



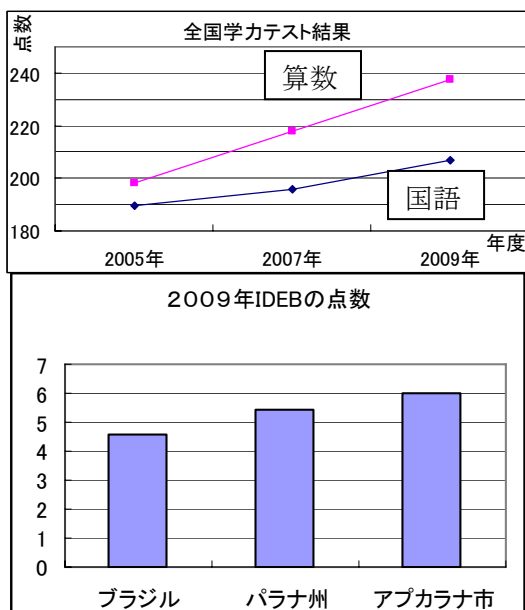
のブラジル訪問で、首長に正式に会ったのは、ここが初めてでした。挨拶後、豊橋市長・教育長からの親書と数々のおみやげ（絵はがき、でんでん太鼓、手筒花火のミニチュア、テーブルクロス、豊橋バッジ）をお渡ししました。どれもそれぞれに説明を加えてお渡ししたので、大変興味深く喜んでもらいました（左写真の左から教育局長、市長）。

情報交換は市長室で行われ、市長も同席でした。なんと、市長は、情報交換を行った 3 時間中ずっと参加し、さらに、私たちにアラポンガス市の一日制の取り組みを説明してくださったのは、教育局長でした。

（右写真一番左が市長、その横が私、通訳アケミさん、以下、教育局の方々、一番右の方が教育局長）。



アラポンガス市では、市民の声を政治に反映させようと市内各地で地区集会を開く中で、市民の声から一日制学校の必要性が検討され、実現されてきました。2001 年に一日制を法律化し、実際に一日制学校実現に向けて動き出しました。例えば、地域社会との連携協力体制の確立、教育課程作成プロジェクト、市立学校の現状把握と資金計画作成、PTA や学校評議会との連携など、様々な対応を行ってきたそうです。



成果としては、ブラジル学力テスト並びにそこから換算する IDEB の結果を示してくださいました。また、教師が自分たちに自信を持ち始めたこと、母親が仕事に出かけることができ家庭の収入が増加したこと、犯罪が減少したことなどをあげてくれました。

アラポンガス市からの説明の後、もちろん私からも日本の教育について説明し、お互いの教育についての情報交換を行いました。今日の訪問では、教育局だけではなく、市長を交えての情報交換をすることができたことが大きな成果でした。

9月28日 アブカラナー日制学校 ジェイス ルイス校訪問



今日は、楽しみにしていた、一日制学校の見学です。おまけに、今年度新設したばかりで施設も新しい学校でした。この建物は州が建て、それを市が使用していると言うことで、州が一日制学校の取り組みを進めたいという考えで建設したそうです。

まず、玄関がすばらしかったです（左写真上）。これまでブラジルの学校は、玄関がどこなのか分からない学校がほとんどでした（日本では考えられない）。そして、左写真下に校舎模型を示しました。敷地面積は、20800 m²。日本の学校と同規模かやや大きめです。ようやく学校らしい敷地と建物

に出会えたという感じです。

一日制学校の教育課程の一端を紹介します。まず、日課ですが、右表のようです。一日8時間の授業があります。これは、1年生も同じです。おやつ休憩、給食以外は休憩時間が確保されていないのは、2部制の学校と同じで適当に時間配分していると考えられます。次に、授業教科を、例として1年生の1週間の授業時数と共に示します。国語⑨算数⑨作文①読書①体育②ゲーム/チェス①パソコン①音楽①バレエダンス①環境①社会②理科②理科の実験①宗教①美術②読み聞かせ②遊具で遊ぶ①ビデオ②。合計40時間。一日8時間授業で5日分です。アブカラナーの一日制学校では、ほとんどこのような授業内容が組み立てられているそうです。すさまじい学習内容に、ただただ驚かされます。

| 一日制学校の日課 | |
|----------|-------------|
| 1限 | 8:00~8:45 |
| おやつ休憩 | 15分間 |
| 2限 | 9:00~9:50 |
| 3限 | 9:50~10:35 |
| 4限 | 10:35~11:15 |
| 給食 | 11:15~12:30 |
| 5限 | 12:30~13:15 |
| 6限 | 13:15~14:00 |
| おやつ休憩 | 15分間 |
| 7限 | 14:15~15:05 |
| 8限 | 15:05~16:00 |



校長先生にお話を伺った後、校舎内を見学させて頂きました。新しいということも手伝い、とてもすばらしかったです。これは、ある教室ですが、黒板はホワイトボードになっており、正面上には以前紹介したパラナデジタルというテレビが設置され、様々な学習に活用できるようになっていました。この教室は、廊下の突き当たりにあるため約63 m²と日本の教室とほぼ同じ

大きさでした（残念ながら、一般の教室は、49 m²と小さめでした）。1年生の授業にはありませんが、2年生以上の授業には、空手も用意されており、私もすごい迫力の型を見せてもらいました。

話は変わりますが、一日制とは関係のないブラジルらしさを見ました。今日はすごい荒天で朝からすさまじい雨でした。そのため、今日はクラスの2/3位の子が欠席でした。



9月29日 アサイ市日本語学校訪問



今日は、マリンガから 140km ほど離れたアサイ市にある日本語学校を訪問しました。アサイ市の市名は日本語です。それほど日本人に関わりのある市です。当地の開拓当時、サンパウロ州から 10 家族がこの地に移り住みましたが、その内 7 家族が日本人だったそうです。その後も、日本人移民が多く住みついたようです。市の入り口には、上写真左と中のような鳥居と「いらっしやいませ」の看板が私たちを迎え入れてくれました。市内に入ると上写真右のような小さな商店街です。人口約 1 万 2 千人、その内日系の人が約 5 千人。



4 割以上が日系の方です。

学校に入ると直ぐに左写真のような小さい教室があり、机が並べられ授業が行われる雰囲気を感じました。今年度の生徒数は、70 名弱ですが、去年は約 150 名、一昨年は約 200 名いたそうですが、日本の景気の悪化により生徒数が激減したそうです。今年の生徒の内、約 20 名が中学生以下、約 20 名が高校生、約 30 名が大人だそうで、大人の中にブラジル学校の先生が 5 名いて、ブラジル学校にいる日系の子の指導に役立てるために日本語を学びに来ているとのことでした。このような人がいると、日本から編入しポルトガル語のできない子でも大変助かります。

数名の生徒（左写真）、その後、日本語学校の先生と懇談しました。その中で、特筆すべきことが三つありました。一つは、日本から転入したある子が、学校の先生や親から、「日本のことは忘れろ、写真など思い出のものは見ない、日本語は使わない」などと言われているというのです。おそらく、ポルトガル語を早く覚え、ブラジルに早く順応するための助言



だとは思いますが、話している生徒は本当に悲しそうでした。子どもの健全な成長にとっては大きな壁になります。クリチバでの州事務局での話題にしたいと思いました。

二つ目は、私がこの学校の先生にお願いしようと考えていた「ここで、ポルトガル語教室を開催して下さい」ということを、すでに、3 年前前から実践していること。昨年度は約 30 名の子にポルトガル語を教え、子ども達の編入の手助けができていたとのことでした。

三つ目は、来年度、アサイ市立の学校二人と群馬県の先生二人が 1 年間交流研修を行い、お互いの市の教育に生かす取り組みを行うそうです。素晴らしい取り組みだと思いました。

日本の景気悪化が、大きく影響している実態を聞くことができ、実のある訪問でした。

9月30日(木) 7月30日の州教育局HP

Educador japonês diz que investimento em formação de professores é diferencial do Paraná

30/7/2010 18:15:57

O instrutor do Setor de Educação Escolar do Conselho de Educação da cidade de Toyohashi, no Japão, Isamu Ikezaki, foi recebido nesta sexta-feira (30) pela chefe de gabinete da Secretaria de Estado da Educação (Seed), Cinthya Menezes. O encontro oficializou o encerramento da primeira etapa do intercâmbio que trouxe Ikezaki para conhecer as políticas e programas educacionais do Paraná. O que mais chamou a atenção do educador foi o investimento realizado pela Seed na formação de professores.

Segundo Ikezaki, o que o Paraná tem realizado para oferecer formação adequada aos professores da rede pública é um diferencial não apenas em relação ao resto do país, mas também internacionalmente. "Nem no Japão são pensadas tantas formas de investimentos para professores, por isto é interessante o contato com outras maneiras de gestão pública, como esta que está sendo feita no Paraná", comentou.

As diferenças sociais existentes na realidade das escolas também chamaram a atenção do instrutor. Ele concluiu que quando o Brasil superar as desigualdades, terá uma educação tão boa quanto a japonesa. "É um percurso difícil, mas o Paraná está indo por um caminho interessante", disse.

Ikezaki veio com a intenção de realizar uma troca de informações sobre os sistemas educacionais do Paraná e do Japão e saiu satisfeito com esse primeiro momento. "Esse intercâmbio superou as minhas expectativas, pois consegui obter muitas informações sobre educação do Paraná e também consegui mostrar um pouco da realidade educacional japonesa", comentou. Ele afirmou que, inclusive, antecipou assuntos que irão facilitar a adaptação tanto de estudantes japoneses no Brasil, quanto de brasileiros no Japão.

Ele ainda visitou a Secretaria de Estado Cultura, Secretaria de Estado da Ciência, Tecnologia e Ensino Superior e Secretaria Municipal de Educação de Curitiba. Na segunda etapa do intercâmbio, Ikezaki voltará no início de agosto para conhecer escolas estaduais e municipais municípios de Maringá, Paranavaí, Arapongas, Apucarana, Londrina e Assaí.

今日は、これまで紙面の都合で報告できませんでしたが、ブラジル訪問前半最終7月30日(金)に州教育局を訪問したときの記事を紹介します。

日本の教育者によると教師育成への投資がパラナ州の違い



今週金曜日(30日)州局長秘書のメネゼス・シンチア

さんが日本の豊橋市より来伯している池崎勇先生をむかえました。このミーティングはパラナ州の教育政策やプログラムを勉強しに来た池崎先生の訪問の第一期間を終わらせるものでした。先生の目にもっともまったものは教育局の教師育成への投資。

池崎先生が言うにはパラナ州が公立の教師育成のために取り組んでいる事はブラジルの他の州だけでなく外国に比べても特異である。「日本でも教師の為にこれだけの投資について考えていません。そう考えると、パラナ州と行っているような他の機関と情

報交換することは大事ですね。」と話していました。

学校の現状に存在する多様性も先生の注意を引きました。彼はブラジルがその違いを克服した時には日本と同じ様な良い教育に達すると結論した。「難しい事ですが、パラナ州は興味深い道を進んでいます。」

池崎先生はパラナ州と日本の教育システムについての情報交換をしに来ましたがこの最初の期間に対して満足している。「この期間ではパラナ州の教育について色々な情報を知る事も出来て、その上日本の教育についても話す事が出来たので、私の期待を超えました」と話していました。彼は日本の生徒のブラジルでの順応とブラジル人の日本での順応を手助けする話も先に進める事が出来たと話していました。

彼はその他にも州文化局、州科学・技術と大学局とクリチバ市教育局を訪問しました。訪問の第二期間では池崎先生は八月の初めに戻ってマリンガ市、パラナバイ市、アラポンガス市、アプカラナ市、ロンドリーナ市とアサイ市の市立と州立学校を訪問します。

この頃は、足腰の状態が最悪で、私自身と上写真のメンバー誰もが再渡伯を心配していた時でした。一部変更がありました後半の訪問が実現し、本当に良かったです。



10月1日(金) 州立特別支援学校 ジオゴス リアニ校訪問

再びマリंगा各所の訪問です。今日は、マリंगाにある州立特別支援学校の訪問です。本校は、知的障害者対象の学校で、マリंगाには、本校含め身体障害・重い自閉症・耳の不自由な人を対象にした学校の4校があります。

本校は、午前・午後それぞれ約130名、0～15歳の年齢の生徒が通学しています。午前は8:00～12:00、午後は13:00～17:00です。中には、本校を半日、通常学校へ半日通学している子もいます。校内では、近い年齢同士の子が10名を上限に学級を編成し、各時間帯15～17名の教師と6名の補助員で指導が行われています。

様々な話を聞く中で、一番驚いたのは、このような特別支援学校はこれまで「学校」として認められてきていないということです。日本では考えられないことですが、この学校での各年齢相当の課程修了がこれまで認定されておらず、さらに卒業しても卒業証書も渡していないそうです。つまり、ここが、学校ではなく単に施設扱いされているということです。国では、今、特別支援に関する考え方を大幅に修正している時期で、障害をもった子も通常学校で一般の子と共に教育すべきだと考えています。そのため、通常学校では徐々に特別支援学級がなくなり、子ども達は通常学級で指導を受け始めています。それ自体は素晴らしい考えですが、極端な対応として、ここのような特別支援学校の存在すら認めていないそうです。ところが、パラナ州は、特別支援学校の存在意義を十分認識し、国とは異なる方針で、このような特別支援学校も通常学校と同じ学校であり指導が特別なだけだという考えから、特別支援学校を残しこのような学校も「学校」として認知していこうと州の法律を作り、来年度から実施するそうです。これで、この学校もようやく学校として認知され子ども達も各学年の課程修了を認められることとなります。日本の現状からは信じられない状況だと思いつつ同時に、国とは別な対応で州の法律を決めてしまうことにも驚かされました。

学習の様子も見てきました。パソコン学習をしている11～14歳児、ビンゴゲームで数の学習をしている12～15歳児、ポルトガル語学習をしている8～11歳児、私を迎え入れるために日本語の「おはよう」「さようなら」を練習していた8歳児(右写真上の3人)、色の勉強をしている3～4歳児(右写真中)、読み聞かせをしている7～9歳児。また、リハビリ室(右写真下)が完備、精神科医・内科医やリハビリ技師なども常駐していました。子ども達は大変明るく、先生方は日本の特別支援の先生方と同じように、とても明るく、パワーがあり、役者になり子ども達を指導していました。取り巻く状況は複雑でも、校内にいる子どもや教師の姿勢は日本もブラジルも同じだとつくづく感じました。

